

小林陽太郎氏のリーダー論

絶えぬ企業不祥事を問う

企業不祥事が絶えない。メディアに「隠蔽」「不正」「改竄」という活字が躍らない日はないくらいだ。それも今に限らず、ずっと続いている。企業不祥事を見聞きすると、一人の経営者の顔を思い出す。

小林陽太郎氏。富士ゼロックスの社長、会長を歴任し、国際派経営者として国内外にネットワークを持ち、経済同友会代表幹事としても活躍した。残念ながら9月5日死去されたが、その小林氏の功績の一つに真のリーダーを育てることを目的にした日本アスペン研究所の設立がある。

■

源流は1950年に米国で生まれたアスペン研究所。政官財のリーダーらが泊まり込みで古典や哲学書を読み、対話する場として知られている。その米国のセミナーに誘われて参加した小林氏は「目からうろこが落ちる」ようなインパクトを受け、日本でも同じようなセミナーの必要性を痛感して、奔走した。同じ思いを抱き、独自のセミナーを手がけていた日本アイ・ビー・エム元会長の椎名武雄氏やセゾングループ元代表の堤清二氏らに呼びかけ、さらに資生堂やアサヒビール、キッコーマン、オリックスなどに賛同を得て会員になってもらい、寄付を募り、1998年、日本アスペンの設立にこぎつけた。

日本アスペン会長（その後、理事長）に就任したばかりの小林氏にインタビューしたとき、その動機をこう話してくれた。

「衝撃的な不祥事が相次ぎ、これは時間の経過とともに解消できる現象とはとても思えず、もっと根の深いところに起因しているのではないか。これを契機に真のリーダーを日本の知識層に持たないといけないという意識が高まったことが背景にある」

前年の97年、経済界は荒れていた。第一勧業銀行や野村証券などによる総会屋への利益供与事件が起き、山一証券は損失隠しによる不正会計で自主廃業した。さらに大蔵官僚の接待汚職事件が露見して、経営者や官僚らのモラルのなさ、エリート層の腐敗ぶりがあからさまになった年だった。

この事態に小林氏は「試験のできる人を採用し、清潔併せ呑む人を育成し、結果さえよければいいじゃないかとの風潮が不祥事を助長してきた」と嘆き、「日本の危機」を募らせる。その企業不祥事の根の深いところにあるのは「リベラル・アーツの欠如」と気付く。リベラル・アーツは教養と訳されるが、小林氏は「試験の点数が良いだけでなく、常識、良識、倫理観、感受性などの広義の意味」にこだわり、そのリベラル・アーツを備え、長いスパンで物事の本質を考えるリーダーの育成に向けて心血を注いだのである。

視 点



産経新聞編集委員
廣瀬 千秋

セミナーは5泊6日、対象者は組織の現役リーダー。テキストには「東洋の思想」（岡倉天心）や「日本論」（坂口安吾）、「風姿花伝」（世阿弥）、「科学方法論」（ゲーテ）、「ソクラテスの弁明」（プラトン）などの東西の古典や哲学書。視野を広げ、思索を重ね、疑問をぶつけ合い、そして明確な価値観を基に対話して自分の意見を述べることが求められる。

セミナーを取材したとき、その高度な内容、白熱した対話に、とてもついていけないと驚いたことを思い出すが、エグゼクティブセミナーを始め、ヤング層向けなど合わせ、既に日本アスペンの参加者は2600人に達しているそうだ。

■

もちろん、こうした古典のエキスパートになれば真のリーダーに育ち、企業不祥事が減るのではない。日本アスペンに長年、モデレーターとして関わった哲学者の今道友信氏と成城学園学園長を務めた本間長世氏の共通認識は「優れたリーダーはリベラル・アーツに裏打ちされた人格と見識の持ち主である」として、真のリーダーが「偏ったもうけ主義や会社主義などに振り回されずに、よい事業を創造していくことにつながる」（今道氏）と訴えていた。

あれから20年近くがたつが、小林氏らの志がむなしくなるほど、企業不祥事や経営者の不正が起きる。常々、小林氏は「リーダーが問われるのは経済性と社会性、人間性を両立させる判断力と決断力」と言い続けてきた。経営者らは小林氏らが紡いできたアスペン精神を振り返ってみてはいかがだろうか。